地震考

全

洋学文庫
文庫8
C 199

濤山先生筆記

地震考

41- 7705

頃京畿地大震而京都尤甚日不止京都尊之
人神小祀事而請余題言見其記今古
所說畫學出美因寫仁和年間之徵
以代影云爾寔責云尔
文政十三年庚寅秋七月
卓堂学士

地震考

文政十三庚寅年七月二日申の時ごろに大ゆ地震ひ出
くいなびくくゆり動しゆれ居る活中の土蔵瓶塔など
大ゆいに傾き家居もあり去年の洪水に数多
あり築地石垣などは大ゆ倒れ壊せしもの数
多あり昔はあり所空けと近く新の土地よりかくて
しきはなりはきびくく響きおりくゆれ家
を走り出るく大路ゆ高きの高きを伺ひ

いらかなどは二三日のほどは京の内は殿くなく或は大寺の塔
内はうはうは或は法師の川原へうつる西なる堂屋などは
ひく夜をあかしはるかくて三日四日過ても猶き名殘
の小さき震ひはなほあるはけ夜は夜は二十度も
百度は次第に少なくなりて七八度ばかり三度ばかりなる事
もあり猶ものさわがしけれ既に廿日あまりを經ぬれどなほ
おなじさまにつの震ひもやはらぎ静くこのまどひ恐るる
ことなり世の淺ましき地震はそれにまさりぬ大風は津国

つよく雷は事にもあらず世にいへる事をもきくはそれの往の
大震はなほきこえはべりはそれなる婦女子小兒は
さわぎいはんずるにあらずやはらぎひくいはんやくと尋
ねふるくのさきの舊記をたずねて大震の後小
震ありて止ざるをあるを筆をくのこころをやすく
せんとたよりをもとめる
上古より地震のあること国史にはそれる事はあれ類
聚国史一百七十一の巻災異の部に載て洋ちう

三代實録 仁和三年秋七月二日癸酉夜地震中畧 六日
丁丑虹降東宮其尾竟天虹入内藏寮中畧是夜地震
中畧 世日辛丑申時地大震動經歷救尅震猶不止天皇出
仁寿殿御紫宸殿南庭命大藏省立七丈幄二為御在所
諸司舍屋及東西京廬舍往々顛覆壓敎者衆或有失
神頓死者亥時亦震三度五畿内七道諸国同日大震官
舍多損海潮漲陸溺死者不可勝計中畧 八月四日乙巳地
震五度是日達智門上有氣如煙非煙如虹非虹飛上屬

天或人見之皆曰是羽蟻也中畧 十二日癸丑鷺二集朝
堂院白虎樓豐樂院栖霞樓上陰陽寮占曰當慎失
火之災十三日甲寅地震有鷺集豐樂院南門鶏尾上
十四日乙卯子時地震十五日丙辰未時有鷺集豐樂殿
東鶏尾上下畧
皇帝紀抄云文治元年七月九日未尅大地震洛中洛
外堂社塔廟人家大略顛倒樹木折落山川皆震死
者多其後連日不休四十餘箇日人皆為惱心神如醉云々

長明方丈記ニ云元暦二年の比大なる震ふる事侍
りき其さまよの常にあらず山くづれて川をうづみ海
かたふきて陸をひたす勢ひ山をはらひて海
をうかべ岸をうちあぶるなみ海にこぐ舟は波にただよひ
ゆく陸は岸の立てをまどはせり況や都のあたりよハ
をのづから事の堪へがたきもの多し或ハ堂塔寺社一として不全 中略 かくおびただ
しくふるこゝろみ侍りしに日をかさねてやうやく止りしかとも名残なほしばらく
ハ絶ずとぞ侍りしおとろくさまの地震二三十度ふるぬ

日ハかゝ十日廿日をすぎてやうやく遠ざかりぬ
或ハ四五度二三度もしハ一日まぜ二三日ハ一度ふる
ほどの名残三月ばかりや侍らんとぞ
天文考要ニ云 寛文壬寅年 畿内地大震北紀最甚 餘動屢發至于歳終
本朝天文志ニ云 宝暦元年辛未二月廿九日大地震
諸堂舍破壊 餘動至六七月止
ゝ敷ゝある中にも諸ゝ度大震して後小動ゝ止て

ざるべからざるなり大震ハなり我友廣崎氏
かゝる人法國ニて大地震ニ四ツび逢て居ること、
帰国ニて略来をよく知り小動ハ久しく忘れ居
わすれどきハ一度も動ずとやうれさ見現在の人よて
況ときゝて驚きたり

○地震之説

往世術義ニ孔曁曰陽伏于陰下見迫于陰而不能升以
至於地動と如此陽氣地中ニ伏て出んとする時陰氣ハ

抑一ら引くもの来ハ雖ハ地中ニ激攻して動揺する
なり国語の周語ニ伯陽父の言ること如此古代より氣
世説をいふ
天経或問ニ云地ハ本ト氣の渣滓聚まつて形質を成て
元亨疑精の中ニ来ね故ニ元始ニて中ニ陰んで隱れ
四圍ニ竅ありて或ハ蜂の巣のごとく或ハ菌瓣乃
ごとく水火の氣其中ニ伏て蓋氣噴盈して鬱んと欲
してのがるゝことを得ざる人身の筋狂して搖動するが如

雷霆と狂を同ふまを北極下の地ハ太寒赤道之下を偏
熟ま〳〵ともに地震おゝ〳〵砂土の地ハ氣疏〳〵て襄ま
らゞ震ふ〳〵泥土を地ハ充ま氣の藏むゝ孔〳〵故ま震
ふ〳〵溫煖を地多石を地下ま空穴をて熱ま以入て次
ま〳〵ま充ま搖斂せゝ〳〵れ極る則ハ舒放〳〵て地を激搏
もたゝ〳〵ハ大筒石火矢などを高樓巨塔の下ま發きハ
其震衝を被ゝぐゝること甚さゞゝ〳〵拔きゞる大地直
〳〵地震きる事れ〳〵震ハ各處各氣各動なゝと

唯一處の地のみ行うす丈輕重ま由て危ゝの憂あゝ地〳〵
新山を海ま新島あるの類ひおれゝゞ震後地下の燥氣
猛迫〳〵〳〵熱火ま發〳〵て出ま八則震停る行ゝ

○地震之徵

震せんとまる時度間ま地ま孔數〳〵出来て細き壤を
噴出〳〵〳〵田瀾坊ぐゝ〳〵と色法螺などの持上るの類
行ゝんを

又老農曰ま耕まを行るま煙を生ぜるまいときを見て將

る震せんとき啓を動るとゝ
又井水まハりに湧り湧も亦震の徴(しるし)もり 已上天文考要
又世に云ふハ雲の近くなるハ地震の徴なりと是震
ハあるべきの上舟もるゝ煙のごとくこゝのごゝ
えゆるなり
地震の和名をなゐと云 和漢三才図絵ハなゐとあり
なゐの俗名鯰(なまづ)
季唐義の説ハなハ魚にてゐハゆるの約(つゞ)ゝ転ゝ

なゆるといふなり むかし鯰の尾鬚(ひゝ)を動ゝごとく
動揺するを形容して名目とせるゝなゐるとハ重
云の中略をぶるなゐハ名目と影響ハるべゝと是
をもて思ハゝ誠ハ小児の俗説なれども大地の下に大
なる鯰(なまづ)の居るといふ昔より云ふ伝へる俗説なり又
建久九年の暦の表紙ハ地震の虫にて丈取を画
き日本六十六州の名を記ゝるもの有俗説なるべ
けれども既ハ六七百年おもかゝる事もあれば鯰

の説と仏法の書ふう授あるん〻佛説ハ総の不為ともいふ古代の説ハ大やうかくのごときもの多くべし

○法度の国ハ今も考へなるふうと云なるハせう地震と

いへる通ぎ古言の邑鄙ハ殘る事うべし

○三代実録仁和三年地震ゝ條ハ京師の人民出廬舍居于衢路ゝ〻ちくしの京師のあうさ皮も、かくのごとく

此ゝ殘ゝ殘ゝ

○地震ハ多く其應徴の事ハ漢書晉書の天文志

おどろき其應ハ〻〻あれども唐書の天文志ハ

變を記ゝ〻應を記ゝ是春秋の意ハ本づくなり

今太平の御代行の應ハ〻あ〻地震即災異に

して外ハ應の省〻きゝ〻形〻くゝ〻ろをやとんで

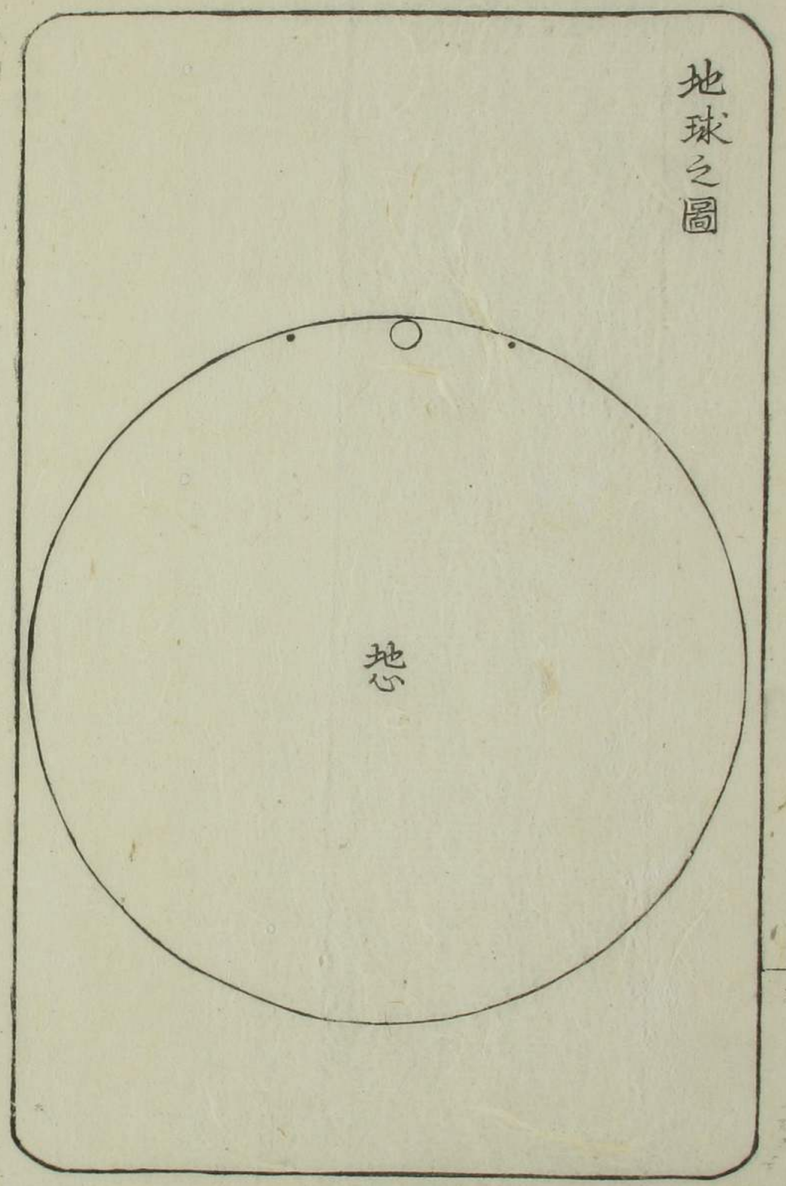
ゝ〻ゝの勢をたちゝ〻ぶ

文政十三年寅七月廿一日

思齊堂主人誌

○此地震考一冊ハ予か師涛山先生の考ふ所にてこの頃童蒙婦女或ハ病者たのどさ段々の虚説まことしくなれ打のくきまゝ尤にハ動も止ぬ此後大震やあらんとかゝる安うぶれハ歴代のたゆゝを著て女まゝひとを教さとろとをもちんぎ清ゝむ京師ハ上古より大震も稀ちり宝暦元年の大震まゝ来ゃで星霜ハ十年を隔をハ多くの人まゝく打世災異ハ係て変を換ゝ疫をかゝる人救ゐたり時の災変とハいづゝも示見ゝゝとも云べゝ人考ふ地震多さ国ハ倉庫家建ものんを用ひくも正日ハ石落れハ木震といづゝも壓死(アツシ)まゝく打 和漢の歴代ハ此世地裂山崩土陷寫出涛起ハ皆邊土ゝり阿含經智度論などハあゝまゝ説て大地皆動くやうハ受えゝたるハあゝゝ初えよいづゝめゝく震ハ各處各気各動也予天経或問ハ據て一圖をまゝけゝ先を明を

地球之圖



地球一周九萬里是を唐土の一里六町として日本の一里三十六町に換算すれば一周一萬五千里となる志摩地地心より地上まで凡二千五百里なり此間黒点の間凡一千五百里なり今度の地震方二百里とて僅かに圏内なる彩の小圓の中なれば地球の廣大なる事をとひそうぞく爾の微少なる彩の地球の廣大なる事をとひそうぞく

○愚按ずるに天地の中造化皆本末あり本とは根本にして心なり心とは震動なる所の至て猛烈なる彩を

さて其心より四方へ敷て漸く柔緩なるを未だ去れば東より揺来る様なれども西より動き来るにあらざれ其心より揺初く四方へ移り其限ハ段々微動して異なれども一度震動せる所京師を心として近国より百里未ハ東武南紀小越西四国中国より撼る又京師の中央にて西北の方心なりや其時東山より此地震に遇て人まづ西山へ向て気を升て忽市中土烟を立て揺来る初めて地震なるを知ることなり

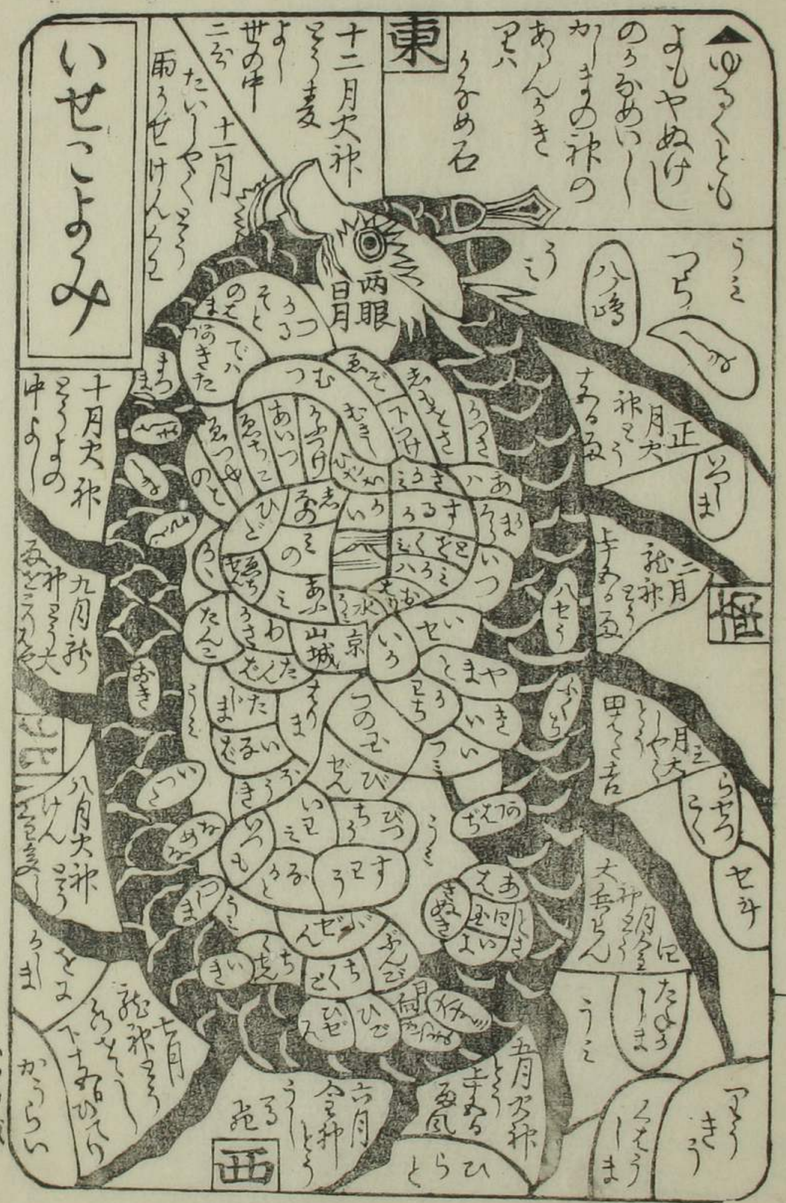
○又地震の徴ある事況在べし所当六月廿八日輪西山に没せる其色血のごとく同七月四日月没せる廿色赤同じく和漢合運云寛文二年壬寅三月六日より廿日まで日蝕夕如血月亦同五月朔日大地震五條石橋落朽木谷崩土民死亡七月朱止出る慶鳴氏の譚に享和三年十一月諸国あるく伝波の小木といふ湊に漂着せしに同十五日の船なりしに同宿の船乗せ〻船頭ともに日和を見むとて出るに船頭のいふ今日の天ハ

城よりあやしげなる雲(モヤ)くとして雲山の麓より孔山
を抜よりて上ハ峯のごとくなりて雨ふるごとく風ふる
ごとくなりて天晴ればこれ年まうくのごとき天晴をゑんぶと大ふ
あまし此時廣嶋氏考くに曰是ハ雲のたゝにあらず
地気の上升なるべんず初年のとき父よ受ける事
を地気の上升なるハ地震の徴(シルシ)なりと雖も猶豫(ユウヨ)有
べくして急ぎ論なる海中をつげ此後ハ山
崩ハ海ゝくて甚危(アヤウ)し又曰雖も猶ほ不の地よりのぞもん

と人をして為ものなど先へ送をそなくよ支度くく
立出ね道の行に里計もゆくとおもひが山中ゝ果く
て大地震せり地ハ浪のごとく揺(ユリ)く大木なども枝を
なを地をおふくまろびたおれ南よりのぞ行くきうね世間小
末(ギ)の儒ハ山崩を堂場ハ潮(ウシホ)漲(ミナギリ)く舎屋(イヘ)咸(ミナ)海よ入
大ゝ形る岩海より浦出ちそれより毎日小動くて翌
年六月ゑ動く正しきゝ乳ん其後日出金山よりいろ
時き地震ハ定えしく完も使を人も投ぜしゝ

ゆびしまさハ好く皆いふ地ハむくりより地震ハ京の
ほうね寺る地震ハ三日ばかりまで其徴を為て皆死
に入るを用ゐ世ず為一人も怪ふなしとかや其徴を
いふ事ハ水なる中と四つ時ハ地震せんとまる為ハ死の中
地気上升して燒(たき)なるくもたゞひ稍ゆ上ハ唯濃くと
して見へ候を地震の徴と云といつ拾るほ考る地
中ハ入ものハ地震をよく考るハ京中ハありてよく上
升の気を考る故地震せんとまる時教千の鷺一度

ほ飛とゐる又或人六月廿七日の夜いまゞ日も出ぬ先て
東丑寅の間ゆ二つを考る東ハ日ゆむくひて多つハ考ゆ
いづれも寿ハ行ぶるハ徴とやいふん
○又はし見ハいつる地震の和名なあふる事鷹大人なハ
魚ゆとゐ淡ハゆ古國を行く為ハ出ハ是國と
ゆゝの初りゆ歩て次ハ建久九年(むまのえ)の暦元(三百五十五年)
あり雑ハゆ是と異を伊豆の國那珂郡松崎村の寺
地ふるき庚戌の中ゆ出る拾まきの鷹なりとぞ



摂記享保九年の所徒よ京四方市と云る盲人ち名
誉の調子聞そ人の吉凶悔吝を占ふよりも遠ちと
部ー應ム云ふ清ム中ちと毎ー年ちて馬沢よ何候を
ら晩年よ及ひくりせーハ中れることを覚えて其くや
ー孫ち人よ交そる多ふ其人の吉凶ム孔耳よひ聞きく
いと加ーやーとりけるー去年ぞふ変ーのる名誉て
そ人ろーー此四方市朔風ろー起ろ僕を呼ひ和く
ひき調ろちり此調ろにくハ大方京中ハ滅却ちべた

で急ぎ食るとも猶多て我を先嵯峨の方へ誘ひゆけ
と云日頃のよぎハぐもあるをハよ迷ふをはつて嵯峨より
嵐山の麓大井源原より第く暫く休息して云やういまゞ洞
ゆなかつゞあるいぐつ大方大火事なべ〳〵と人ゆ取あ行
をそ行きて北へ越せ〳〵よいまゞ洞〳〵ゆ行るハ世も無和
と云へゆ愛宕よハ知まる坊あり是よ後ひゆ事といふいさ
そく文登り〳〵て丈坊よ第く坊を出く何とてかく早く
ハ登山〳〵はとゝせ〳〵ハ去り〳〵の事ゆと第ふ出るといに

と問ても敢安ら氏ゆ〳〵そも言き和第ゆ〳〵と云共和
よ濩ゲ者あり此よ行ま〳〵と行ゆ〳〵ハ什堂よ入く大よよ
ちびゆ〳〵ゆ坊よ行き〳〵洞ゆ初く歩ゆ〳〵とて唯いつまゞ
も此よ居〳〵ゆ者ハ頓て地震ゆ出〳〵夥〳〵き事
ゆ〳〵そら形〳〵（世間ゆ云寅年大地震）何とゆ去ゆ〳〵ゆ彼濩ゲ者ハ架（タナ）作よて
敢て涼第ゆ嵯峨者第く破抜〳〵四方市も京〳〵く第る六十余
ゆ者ゆも有べきゆ什一生の終りをして人の吉凶さ〳〵毒さハどよ
和ゆものゆ已ゆ終ゆ和を去ゆぞるのゆに敢ゆ死場よて去坊〳〵

けるゆゑに不審多き事の極る所以幽々の極る所ハ告ちれハ必ず
毎度各得ち抽論をわと作る愚按るに四方市の古考著きて
賞とるに足りみ既に天地の変異を知りて形と宗山よりの行ハ水
うへ多れ此ハ山よりくハ潤を直ちに其変もあんなれ共ハ
陰極りて陽に変じ陽極りて陰を生じ楽極りて哀生じ
といふに同じ事なり其頃ハ京洛一般の大震有震気充満して歩
むに道なく逃るに所なしと云伝ちれハ四方市も多数倒る極ると
以て変也と及て其音湖の直ちに動も極のゆに笑へ伝る

素問五運行大論に曰風勝則地動　怪異辨断に曰
此説に陰陽ハ地震ハ風気の不落也又曰地震に鯰の
説世伝に有佛説なるに風を以て鯰とし居たるものを
奥ハ陰中の陽物ちれハ風に成と云ふ何まこと
も正理に非ハ遠き説ちり白石の東雅に云地震をなゐふ
るとゐハなゐとハ物ふるとハ動くちり物動の義ちり
今俗に云なゐゆるぐとハ物ゆるも又動くちりゆる物と
いひ伝ちるなどいふも古と同じ上古の語に非ずとして

なをいまも即是をもて思按るに又もとふるとは越乃国
よりいまの二十四国舎人なをへと出るハ伊豆ゆゑ出るなり
をしなへと云へハをつぬハ收る形る收ハ根にして地
をゆふ地震(ナフル)そこ細ふしく揚子方言云東齊謂根曰土
非專指桑根白皮　又日本紀神代巻に根之國と出
るハ地をさ底を　又或人云なゐゆるとハなまゆゑ形
なまのうつゆくゆるをゆふ矣

活東　東隴葦主人誌

題地震考後

災異之可思莫大於地震雖其地坼山陷海
傾河翻不絕翰飛戾天也然若夫吾今傳
記所載及近時邦國更有棟壞牆倒傷
害人畜者人每邂逅然視之徒爲一場奇譚
及其實歴親履心駭竟銷而後始回想當
時以知爲可思已茲庚寅七月二日京地大
震餘震于今未歇人心洶洶言震若有甚

爲將憑何得免民之訛言亦孔之將言某
日時震甚又言某事爲祟又言某日暴風
雨与震並臻重仍丙丑根賊之警人不知所
底凶戎慶業舍務且携家逃震遠地
濟山先生老益悃愊憫其如此爲錄此言
以喻民心釋其惑於妄辭不餘考徵亦
不務多東隴主人受而數你辭而行之
請余識其由適有人爲余說其先人之言

云如某什器今人不悉其用注以爲不便不
知方其大震掩此庶身雖揀壞牆倒保其
無恙又如今灯架設承蠟炬者亦皆震之
備蓋寶曆大震之餘所慮而設至天明
鬱攸之後人不知震之可懼今日之搆造
唯奚之備可見非實歷親履思慮不及
亦人心向背之速如此曰並記此欲人之觸
類而長之每有所懲恣有所備預

文政十三年庚寅秋八月上澣

三緘主人識

齋政館都講

小嶋氏藏板

不與賈人